

書 評

山崎敬一 編

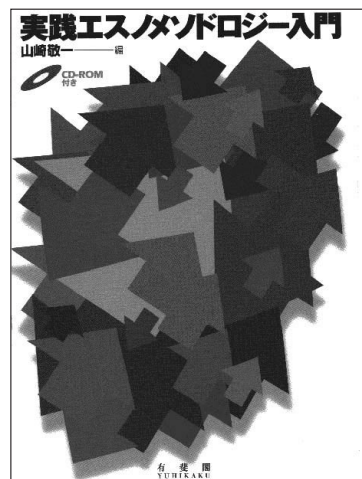
実践エスノメソドロジー入門

有斐閣

ISBN 4-641-07682-0

2004 年発行

評者：香川大学 垂水浩幸



エスノメソドロジーという言葉に会員の皆様はどれほど馴染みを持っているのだろうか？社会学や民族学の研究手法で、簡単に言えば現場で人々が行っている会話や動作を客観的かつ詳細に記述して分析するやり方である。評者は工学部出身で社会学の訓練は受けていなかったため、エスノメソドロジーに初めて接したのは1992年のCSCW国際会議のときであった。この会議は技術と社会学の融合を目指していたとも言えるが、私にはエスノメソドロジー関連の社会学系論文の意義が理解できなかった。協調作業現場について当たり前のことを言っているだけで、何が興味深いのか、何の役に立つのか、全くわからなかった。しかしその後、現在に至るまで、欧州を中心にその種の論文がもてはやされることになる。

自分が出席する学会で流行っている研究分野について「わかりません」では悔しいので、いくつか本を買って勉強してみたが、社会学者の使う言葉に馴染みがなく苦労した。（「相互行為」ではなくて「インタラクション」と言ってくれればすぐわかるのに！）工学分野の人が執筆に加わっている本では、プロトコル分析関連のものがあつたが、エスノメソドロジーの本としてはおそらく本書が最初であろう。つまり、評者は本書を12年間待ち望んでいたのだ。

「実践」のタイトル通り、本書はエスノメソドロジーを自らの研究活動で活用しようとする読者を想定している。社会学者向けの本ではエスノメソドロジーという方法論自身を論じることが多いので、工学者としてはまずこの点で救われる。読者は、第一部「基礎編」でエスノメソドロジーの歴史や基本概念について学んだ後、第二部「実践編」でビデオや会話の記録・分析方法について知ることができる。このため、プロトコル分析などの経験がなくても一から勉強できる。そして、第三部「展開

編」では様々な分野に適用した例を示しており、エスノメソドロジーで何が分析できるのかが具体的にわかることになる。特に印象に残っているのは第二部第7章に示された学生によるビデオ分析研究例で、美容院で客が雑誌を読むことの相互行為の意味を、研究経験の浅い学生が見出したものである。また、第三部 pp.204-210では、CSCWとエスノメソドロジーの接点について詳しい解説があり、これまでの疑問が一気に溶ける思いで読ませていただいた。そしてもちろん、第三部14,15章で示されたCSCL, CSCWの事例は参考になるものである。

CSCWでは、システムの導入により現場における仕事の仕方が変わり、結果的にそのシステムが受け入れられない例が多数報告されている。これを防ぐためには設計時の十分な検討が重要なことは言うまでもないが、協調作業の現場では無意識的に行われていることに意味がある場合がある。例えば、上記の美容院の研究例では、客は鏡や美容師を見ていないことを陽に示すために雑誌を読むことが発見されている。従って鏡を見ながら雑誌を読める読書補助機械など発明してはいけないのである。このようなことを知るにはインタビューなどの手法では限界があり、エスノメソドロジーが工学的に有益になる例と言えよう。またシステム導入後の評価にも有益であることは言うまでもない。

しかしエスノメソドロジーと工学との接点が十二分に追求された書物はまだ日本には存在しないのではないかと、本書はその役割を担ってはいるが、工学者向け「だけ」に書かれたものではないので、用語説明等に敷居の高さが若干残っている。また著者数が多数であるために、全体の統一感にもいくぶん課題が感じられた。本書を端緒にして、工学と社会学の接点で活躍する研究者が育成され、より優れた教科書が現れることを期待したい。